

令和5年度 刈谷市 共存・協働のまちづくり推進委員会

第3回全体会議 記録

日時：令和6年3月19日（火）

午後2時00分～3時50分

場所：刈谷市役所 7階701会議室

出席者

団体名・役職等	氏名
愛知大学 教授	鈴木 誠
愛知淑徳大学 助教	熊澤 友紀子
刈谷市商店街連盟 専務理事	柘植 祥史
刈谷市自治連合会	大野 裕史
一般社団法人まちづくり支援センター 代表理事	塚本 裕章
刈谷市ボランティア連絡協議会 会長	矢田部 寿子
NPO 法人刈谷おもちゃ病院 理事長	三輪 恒雄
文化工房かりや 代表	久保田富士子
防災ママかきつばた 代表	高木 一恵
一般公募	石田 彰宏
一般公募	岡 由香
一般公募	水鳥 幸子
刈谷市民ボランティア活動センター センター長	米田 正寛
市民活動部長	近藤 和弘

欠席者

刈谷市小中学校長会	細川 圭子
刈谷市女性の会連絡協議会 会計	加藤 文子

事務局

所 属	補 職 名	氏 名
市民活動部市民協働課	協働推進監兼市民協働課長	渡部 貴美子
市民活動部市民協働課	課長補佐兼協働推進係長	小原 崇照
市民活動部市民協働課	主事	内藤 佑佳
市民活動部市民協働課	主事	前川 和奏
NPO法人ボランティアネイバース	副理事長・調査研究部長	三島 知斗世
NPO法人ボランティアネイバース	理事・事務局長	遠山 涼子

1 開会・あいさつ

- ・定刻になり、市民協働課課長が開会を宣した後、資料確認を行った。

2 議題

委員長あいさつ

- ・自分の個性やお互いの個性を活かした多様な地域社会をつくるうえで、立場の異なるものが話し合うことにより、共存・協働のまちづくりの推進に寄与する。学びあって協働のまちづくりを進めていきたい。

(1)市民協働事業の進捗状況について

■【資料1】を提示し、市民協働事業の進捗状況について事務局が説明

(共存・協働のまちづくり講座 (実践編))

- ・令和4・5年度係長・園長になった職員27名受講。様々な主体と協力・連携したまちづくりを進めるため、共存・協働のまちづくりにおける市民との向き合い方を学ぶ目的で実施。
- ・担当事業に市民と協働をどのように取り入れるか考えるグループワークも実施した。

(協働のまつり場)

- ・公園緑地課より提案を受け「公園等愛護会活動」をテーマに、関連団体と関係課とともに、愛護会だけでなく、公園がきれいだと嬉しい人や団体が関わることができるようアイデアを出し合った。

(かりや衣浦つながるネット)

- ・10～11月に各市町のボランティア活動施設でスタンプラリーを実施。計125名参加。
- ・2月17日に「団体交流会」を高浜市で開催。計23名参加。活動の工夫や困りごとを共有した。

(わがまちのつむぎ場)

- ・12月3日午前・午後に分けて開催し、ボランティア団体や企業等20団体が参加した。各団体が積極的に交流を行い、情報交換が行われた。
- ・23地区紹介パネルを設置。5名のまちコが地区取材及びパネル作成を担当した。

(わがまちのしゃべり場)

- ・11月19日市民ボランティア活動センター(以下ボラセン)主催の「まなぼうさい」とコラボで開催した。
- ・1ブースとして出展し、「まなぼうさい」の気づきから、日ごろの思いを話すきっかけとなり、参加者や団体の声はグラフィックレコーディング(GR)を用いて表現。GR体験機会としてまちコモ参加・協力した。

■質問・意見交換

【まつり場について】

委員：代理で地区の方に出席していただいたが、和やかな雰囲気の中で好意的な発言が出て楽しかった、と感想を聞いた。公園を地域で親しみのあるものにしていくため、地元の人たちとさまざまな団体がコラボして親しみのある活動にしてもらいたい。

【つむぎ場について】

委員：企業、行政と直接話をする機会をきっかけに、つながりが広がるとよい。ボラセン登録団体は13団体程が高齢化を理由に活動をやめているが、他方で新しい団体もうまれ、全体数は増えている。

【「共存・協働心得帳」について】

委員長：「共存・協働心得帳」とはどういったものか。

事務局：市職員のガイドラインとして、「共存・協働」を理解しよう、「共存・協働」を進めよう、「共存・協働」を楽しもう、3つの章で構成されており、職員間で共有・活用している。

(2)夢ファンド部会の協議報告について

■【資料2—1～3】を提示し、夢ファンド部会の協議結果を事務局が説明

(令和5年度夢ファンド補助金の実施状況)

- ・まちづくり活動支援事業補助金：5件。うち4件は清算完了。1件は3月末事業完了後、報告を受けて清算を行う。
- ・NPO法人設立支援事業補助金：1件。3月末事業完了後、報告を受ける。
- ・まちづくりびと支援事業補助金：申請3件。いずれも清算まで完了した。

(令和5年度公開審査会 審査結果)

- ・1月13日(土)公開審査会を開催。まちづくり活動支援事業補助金：申請5件。全て採択された。うち3件は、補助金申請額5万円以下のため、書類審査のみで採択を決定した。
- ・【第5回SUHARA MUSIC FES】2日間開催へ変更。4月6日13時～クラシック中心、7日10時～ジャズ・ロックを中心に演奏を予定。
- ・【手品会】令和7年3月29日開催決定。
- ・NPO法人設立支援事業補助金：申請1件。2年目。補助金額5万円。

(寄附実績)

- ・市民からの寄附を基金に積み立て、寄附と同額を刈谷市も基金に積み立てる「マッチング・ギフト方式」を採用し、運用している。
- ・ふるさと納税による寄附が昨年度に引き続き増えており、今後も同様の額の寄附が見込まれる。次年度以降も引き続き、補助金の活用に向けて取り組む。

■質問・意見交換

【寄附金の活用について】

委員：寄附額が増えた点はよいが、ふるさと納税の寄附対象から外されないよう、増えた分も有効に活用いただきたい。制度やPRの見直し、基金の対象を広げる等を検討してはどうか。

事務局：「元気な地域応援交付金(以下、元気交付金)」をリニューアルし、令和6年度より「笑顔あふれる地域づくり補助金(以下、笑顔補助金)」として自治会等を対象にした補助制度を始める。自治会等の活動にも夢ファンドを活用いただく。

委員：笑顔補助金の申請は気軽にできるか。

事務局：自治会長が認めた事業が条件になるが、申請手続きは簡素にする方針である。

委員長：基金は特定の目的で運用されるもの。新たな笑顔補助金についても書かれておくべきである。

【まちコの活躍機会について】

委員：元気交付金では住民会議の開催によって、まちコの活躍機会が設けられていた。住民会議の開催がなくなったとしても、まちコの活躍機会は継続していただきたい。

事務局：まちコの活躍については、まちづくりん部会で検討を進めたい。

【夢ファンド補助金の申請・審査について】

委員：審査員・事務局の努力に感謝したい。公開審査会での結果を待つ間の座談会がよかったと聞いた。全体として応募数は少なかつたため、次年度は応募数倍増を目指し、委員や事務局と共に取り組みたい。

(3)まちづくりん部会の協議報告について

■【資料3—1】を提示し、まちづくりん部会の協議結果について事務局が説明

(令和5年度の活動実績)

ア：まちコ派遣：11件

- ・自治会や各種団体、行政等から依頼を受け、ファシリテーションはじめ、地区勉強会への派遣を実施。事前打合せを含め計17回、のべ47人のまちコが担当。

イ：まちコゼミ：17回開催(令和6年3月19日時点)

- ・大野ゼミ(全11回)：まちコのスキルアップを目的に開催。下半期はプレゼンテーションの技術をテーマに、パワーポイントを用いて作成・発表し、相互に意見を伝えて学び合った。
- ・塚本ゼミ(全6回)：まちコ個人の活動経験や人となりによってスポットを当て、互いに知り合い、学びあうことを目的に開催。リレー形式で計6名から活動紹介した。
- ・ゼミとしての開催は今年度で終了するが、両名ともに世話人としての活動は継続する。

ウ：交流会：2回

- ・【第1回】9月16日(土)に開催。大野ゼミで学んだ課題解決手法のミニ講座、まちコカフェ体験会を開催。まちコに限らず参加を呼びかけた結果、地区からの参加も含め25名が参加した。

- ・【第2回】3月31日(日)に、まちコ活動の振り返り発表、元世話人守随純子さんによるワールドカフェ体験会等を開催予定。

エ：まちコ養成講座「つなぎの学び舎」

- ・2月17日(土)に修了式を開催し、12名が修了、新たに5名がまちコに登録した。
- ・まちづくり活動の人材を育成するため、受講しやすい講座内容を検討する。

■質問・意見交換

【ゼミ活動のふりかえり】

委員：前半は課題解決の技法を用いて、地域の現場で地域課題に取り組んだ。小山地区では課題分析をひな形にまとめることができた。ゼミ参加者には勉強会の講師を務めていただいた。

後半はプレゼンテーションの技術をテーマに行い、講義資料はまちコルーム(サイト)に掲載。ゼミに参加できなかった方から勉強して役立っている、と聞き、成果を感じている。

委員：まちコをPRするため、個人にスポットを当てて知り合う交流会の形で進めた。オンライン開催したことにより、進行の技術を高めることにもつながった。

委員：(まちコとして)勉強してきたことが、派遣依頼を受け自信をもって前向きに取り組めることにつながった。以前と比べてまちコの熱量が上がっている。うまく進めるにはどうしたらいいか、笑顔補助金での活動との連携も考えながら進めていきたい。

委員：(まちコとして)小山自治会勉強会、ファンドレポート取材を担当した。高須地区の活動にも取り組んでいるが、地区単位ではなく団体として盛り上がっているところもある。それらを地区につなぎながらまちづくりを広めていきたい。

【ぼらっち。カフェの紹介】

委員：第2火曜10時~12時 第4火曜18時~20時に、自由に話せる場を設ける。悩みや夢、コラボしたい話など、みんなの声を聴きながら、事業に反映したりマッチングを図りたい。まちコとも連携を図りながら、盛り上げていきたい。また、まちづくりん部会に橋渡しをしていきたい。行政各部署や企業の補助制度がまちづくりに活用されるよう、紹介しながら取り組みたい。

【まちコ登録者の広がりについて】

委員：まちコ登録を検討中とした人はどのような理由であったか。

事務局：現役の地区役員は忙しい様子がある。まちコ交流会には学び舎修了生から数名参加予定である。

委員：自分が軸足を置く活動に役立てようと参加している方もいる。まちコ登録をしていなくても、まちづくり活動に携わっていると理解している。

委員：自身の団体があると、その活動が忙しく、市全体の取り組みを考える余裕が持てないのが現状である。

委員長：委員の“弟子”となり学びたい人もいだろう。現場は忙しいから、つなぎの学び舎で学んで来ては、など弟子を養成する活用のされ方があってもよい。

委員：まちコ登録者は増えている実感がある。登録を躊躇する背景には、責任の重さや負荷が想像しづらいことが想定される。世話人や現まちコでサポートし、楽しく参加する人が増えることがまちづくりにつながる、というストーリーを今あるSNS等も活用して紡いでいきたい。

【まちコによる夢ファンド活用】

委員：夢ファンドの申請件数が少ないことについて、自分も申請し活動した経験があることをふまえて、まちコ自身が学びあう場を考えたい。夢ファンドレポート活動を通じて、団体活動の進め方やイベント主催者に聞いたことを活かしてまちコ自身が申請したら、競争も生まれ高め合うことも期待できる。イベントの企画が増えると、まちづくり活動が活発化する。

【広報/届けたい人に届かための情報発信/SNSの戦略的な活用】

委員：自身の団体では、いろいろなPR活動を展開している。今年度3回もテレビ取材を受けた。いろいろなところから声をかけてもらうことも大事である。

委員：SNSが中心。寄附金の活用は積極的に取り組んでいただきたい。団体に協力してもらうのもよい。

委員長：SNS は、発信はできたとしても活動に結びついているか、そのハードルをどう乗り越えるかが重要であり、今後のまちコ研修で検討いただけるとよい。

委員：SNS で拡散しても届いてほしい人に届いているかどうか。SNS を理解し、対象にあわせて戦略的に発信して取り組まなければならない、公平さが求められる行政の立場では難しい部分かもしれない。

委員：ポイントは継続すること。発信手段は様々設けている。情報発信に詳しい若者の力を借りながら、少しずつつながりを広げる。ちらしだけでは情報は行き届かず、口コミが一番である。親しい人から声がかかると参加してみようかなと思う。いろいろな場があることが大事である。

委員：商店街の活性化事業でも基本はSNS の活用、デジタル化の流れがある。口伝は強いが、SNS のスピード感とは異なる。facebook やブログなども時代遅れと言われるが、世代や伝え方によって有効な使い方がある。商店街連盟も高齢化しており、新しい感覚を取り入れることも大事だと考える。情報発信ツールのデジタル化は、コロナにより革新的に進んだ。活用していかなければならない。

【夢ファンドの申請につながるPR】

委員：採択数が増えたら話題となり、まちづくりに取り組みやすい市だと注目が集まり、さらに申請につながるうねりとなる。まちコ自身が夢ファンドの申請のコツを伝える役割を持ち、夢ファンドのPR を兼ねるとよい。ただし、申請数が増えた場合、審査体制は対応できるか検討が必要。一方で、申請のハードルは低く考えるのがよい。

委員：やってみない？と対面で声をかけることが申請につながるうえで重要。制度をゆるやかにしても広報手段がオンラインだけでは十分ではない。まちコから手渡ししてPR するのが効果的である。

委員：夢ファンドレポートのパネルを団体のイベントでPR してもらい、参加者にSNS で展開してもらうなど、今あるツールを活かして掛け合わせていくことで取り組める。

委員：夢ファンドの内容が広く伝わっていないと感じる。商店街でも様々な情報発信に取り組んでいるが、広がりがない。商店街でも少子高齢化など課題は多くあり、それらがいろいろな形でつながっていくとよい。商店街の感覚とボランティアの感覚とが融合するにはどうしたらよいか考えていきたい。

【企業の連携にむけた情報発信】

委員長：企業との連携が増える中、企業では協働相手となるパートナーを評価し、ふさわしいと判断したら応援したり寄附したりする。企業と付き合う際の情報発信で意識するとよい点とはどんなことか。

委員：企業はまずホームページで情報を確認する。まちコとは何か、夢ファンドはどんな活動か、発信されていないと分からない。例えば、夢ファンドで子どもたちのための活動が採択されていることが分かれば、応援寄附につながる。企業にとって地域のために活用されていると分かることが大事である。

委員長：企業はCSR 活動を通じて地域社会に認められる活動をしているかという点は、株主にとって重要な評価の一つである。発信する側（団体）が企業に何を届けたいかを考えて発信していくことが、よい協働につながるポイントである。発信する側が出す情報・内容を工夫するトレーニングをすることも重要である。

■【資料3—2】を提示し、共存・協働による地域活動の活性化に向けた検討について事務局が説明

（資料3—2／令和5年度の協議概要と今後について）

- 共存・協働によって、各自治会等で取り組まれるとよいことについて検討すること、課題が具体化されている地域をモデルに取り組みを考えること、を協議の方針とする。
- モデルの候補として、元気な地域応援交付金、まちコの派遣活動等で課題解決の方策検討に取り組む5地区の実践を基に意見交換を行い、検討するテーマを選定する。
- 部会の協議内容を踏まえ、今後の流れを下記の通り検討した。
 - 【ホップ】組など小さな単位にヒアリングし、ヒアリング結果からモデルテーマを選定する。
 - 【ステップ】モデル地区を選定し、まちコによる伴走支援も含めた後方支援を行う。モデル活動を振り返る。
 - 【ジャンプ】取り組みのレベルアップをし、他地区へ展開する。
- 主体は地域であり、やりたい、真似したいと思える取り組みをサポートする。

■最後に一人一言ずつ発言

- 委員：委員会でのまちコ活動へのご意見から、まちコの活動の方向性が見えてきた。
- 委員：SNSが発達しても対面のよさを感じる。組織との連携には、顔を見ながら話をすることで次のステップが見えてくると考える。そうした点を大切にしたい。
- 委員：地区の活動に携わる中で、学校と地域がつながり一緒に取り組もうと話をしている。単発のイベントで終わりではなく、継続的に地域の行事に関われると、地域の愛着を生む活動となる。
- 委員：まちコの活動は地域の活動だけでなく、テーマ型の活動を持つ人もいて、幅広く継続的に活動している。全国的な事例はあるかもしれないが、県内でも貴重でよい取り組みである。まちコ自身がマスコミで取り上げられていくとよい。これからも引き続きがんばっていただきたい。
- 委員：まちコのPRを考えるだけでなく、伴走者として地域に飛び込む中でステップアップできた。東刈谷地区でボランティアの読み聞かせ活動を続けていたことをきっかけに、授業を1年から6年生まで担当することとなった。こうした取り組みが広まるとよい。
- 委員：地域が主体であり、地域にヒアリングすることがスタート。新しいことに取り組む上で、地域で何を望み、どういうことなら参加してもらえるか、それを確認する。ヒアリングは大変だろうが、顔と顔を合わせてニーズをくみ取っていくことが大事である。
- 委員：見えている課題は解りやすいが、まだ見えていない課題に気づいて改善すること。課題をいかに顕在化するか大事である。
- PRして広げるためには、中小企業など資源が少ない場合は一点集中で絞り込む必要がある。行政の立場では平等性が担保できないため難しく、商店街など連盟の場合も、バランスをとるため幅広く発信することでぼやけてしまいがちである。しかし、自分のことだ、と受け止めてもらえるPRができれば、その人がコアになる。夢ファンドなどの情報も受けとめやすくなる。
- 委員：まちコ活動報告のあった西部地区の活動では、社協の福祉サポーター、NPOも地域の人も一緒に活動した。まちコでないまちづくりコーディネーターもいることを認識しなければならない。ヒアリングなどを通じて把握する作業が必要である。
- 委員：高齢者支援施策を議論する際、福祉を全面に出すと重たいテーマになりがちである。楽しさを前提とし、まちづくりはみんなで支えることだと念頭におき、軽く楽しく仲間を作っていくよう、発信の仕方やつなげることを忘れずにいたい。また、情報発信は、届けたい人に届いているか、メンバー間でコミュニケーションをとることを意識してよいものに取り組みたい。
- 委員：まちコの活動についてさまざまな発信があって素晴らしい。ボランティア連絡協議会（ボラ連）は40周年を迎える。登録団体は80団体から49団体になった。「ボラ連は永久に不滅です」と伝えたいが、どうしたら魅力のある団体として発信できるか、みんなで考えていきたい。
- 委員長：どんな点が魅力といえるか、人の言葉から参考になる。分析をみんなで取り組めるとよい。
- 委員：小垣江地区で活動している。地区によって考え方が違う。組や班の単位の方が動きを始めやすい。能登の被災地支援の取り組みで炊き出しをした。家から出られない高齢者の方へ、周囲の人が代わりに食事を届けていた。大きな地域での町内会単位のしくみはあったが、小さなコミュニティの単位でも情報が得られる。それは普段は目に見えない。組・班で活動しやすいような支援策を期待したい。
- 委員：学校との連携について、学校へ入ることはハードルが高いが、授業に取り組みされているお話は素晴らしい。東刈谷小をモデルとして展開されていくことも部会で議論されることを楽しみにしたい。
- 2つの部会間の関わりとして、「いかに伝えるか」といった情報発信が接点になると気づいた。不特定多数へ届けるツールよりは、小さなコミュニティの草の根のつながりで夢ファンドは成り立っている。そこへまちコが入り込んで取り組んでいくとよい。顔の見える活動でなければ難しく、そのような規模感で取り組んでいくとよいことを、今日の議論から気づくことができた。

■【当日配布資料】を提示し、地域まちづくり活動について委員長が説明

(当日配布資料/『まちむら』164号(P33-34/P41-43))

委員長：公益財団法人あしたの日本を創る会「あしたのまち・くらしづくり活動賞」での講評をご紹介します。200団体程の応募から選定。地域の課題に取り組み、変化した経過を評価した。地域まちづくりは、楽しい活動であることが前提であるが、日々の暮らしが大変で助けを求めたい世帯はある。そうした声に耳を傾け、包括してまちをよくすることが重要である。日進市では、フードドライブをコンビニへ展開し、新たな生活ニーズ、子どもの声を把握し、行政等へ届ける取り組みがある。地域の様々な立場の人たちができる範囲で継続して関わり、支えあいの地域をみんなで作る、地域の中で命を支えるコーディネートをする取り組みである。刈谷市内でも15店舗がフードドライブ活動に取り組んでいる。刈谷市では素晴らしい仕組みが備わり、活用しようとする市民がいるが、周辺自治体の優れた取り組みの情報を集め、共有することも有効である。

委員：市民協働課が関わる、地区/多文化共生/共存・協働のまちづくりに共通する点として、キーパーソンの確保、そして、組織の継続の課題がある。自治会の運営も難しいところも出てきており、文化の継承も高齢化や会員数の減少により難しくなっている状況もある。情報発信もキーワードで、ホームページは情報を取りにいかねばいけないが、届く情報発信が重要になってきている。あいかりや公式LINEは、まち歩きと組み合わせたキャンペーンにより、登録者が12万人に増えた。一方でデジタルバイド(利用できない人との格差)の課題もあり、教室を開いて、使えるよう支援に取り組み、もれなく情報を受け取れるよう工夫を凝らしている。地区の課題は喫緊である。組や班の組織のあり方は地区ごとに異なっている。自治会組織を見直していくため、「自治会業務効率化支援事業補助金」では自治会事務の軽減を目的とした枠を設けた。自治会加入率は5割を切る中、災害発生時には顔の見える付き合いが大事である。そうした社会を見据えて地域の課題を考えたい。

委員長：行政が直面する課題を共有し、地域のみなさんの活動の動機としていただきたい。

3 その他 (次年度のスケジュール)

■【資料4】を提示し、事務局より説明

(共存・協働のまちづくり推進委員会開催予定)

【推進委員会】

- ・第1回：令和6年10月中旬、第2回：令和7年3月中旬

【夢ファン্ড部会】

- ・第1回：令和6年6月中旬、第2回：令和6年11月上旬、第3回：(公開審査会)令和7年1月中旬

【まちづくりん部会】

- ・第1回：令和6年8月下旬、第2回：令和7年1月下旬

以上